

真宗学とは何か

——金子大榮先生の学恩を謝す——

廣 瀬 杲

ただいま、幡谷先生から、この度のご法会の主旨を、お気持ちを込めて、お話しいただきましたが、そのご挨拶を拝聴しながら、私は、金子先生がお亡くなりになられたときのご様子を、改めて心に思い浮べておりました。

先生がお亡くなりになったのは、昭和五十一年の十月二十日午前四時半であります。私は、そのとき、お宅からお電話をいただいて、ハイヤーを飛ばしたのですが、先生は、もう息を引き取っておられました。私がお邪魔したときには、まだ主治医の先生はおいでになっていませんでした。もう何もお話しにならなくなってしまわれた先生のお側に坐って、主治医の先生を待っておりましたときの、どう表現したらいいのかわからない気持ちが、いまでも思い起されて参ります。やがて、お医者さんが来られ、先生のお体をお調べになり、私たちの方を向かれておっしゃった言葉が思い出されます。「どこも悪いところはないし、死亡診断書をどう書いたらいいんでしょうかねえ。老衰というよりほかには書きようがないですねえ。」と言われてから、ご自分で、咳くように、「私も、できることなら、金子先生にあやかりたいですねえ」と言われたご様子が、非常に印象深く、私の脳裏に刻まれておりました。ただ今もその

ことを思い起しておったわけでありませう。九十六歳という、文字通り、一世紀の歳月を生き尽された金子先生の最後は、このようなものでありました。そして、今年、七回忌をお迎えすることとなったのであります。

金子先生の七回忌と申しますが、本年を中心に致しまして、私たちにとって非常にご縁の深い先生方の年回のご法要が、次々と回ってくるわけでした。昨年は、正親含英先生の十三回忌でありましたし、今年、金子先生と一日違いでお亡くなりになられた山口益先生の七回忌でもあります。そして来年は、曾我量深先生の十三回忌に当ります。

そのうえ、今年、安田理深先生がお亡くなりになる、というようなことで、何か、そういうことの全体が、私たちに非常に大切なことというか、決して看過してはならないことと申しましょうか、そういうことを語り掛けていくのだ、と、実感されるものがあります。実は、そんなことが、昨今、私の胸中を去来しておりますので、今日は、しばらく時間を頂戴して、心に浮んで参りますことを、できるだけ卒直にお話しさせていただこうかと考えております。

「金子大榮先生の学恩を謝す」というような題を掲げさせていただきましたが、金子大榮という先生は、いったい、どういうお方なのか、と、どなたかからお尋ねを受けますならば、私は、いつでも、どこでも、誰に對しても、何のためらいもなく、「新しい真宗学を身を以て開拓してくださったお方であり、その真宗学のために生涯を尽し切られたお方である」と、はっきり言い切ることができません。というよりも、そのようにはっきりと切り切らないのではないかと気がするのであります。九十六年という年月をかけて新しい真宗学を開拓し、その道にご自分の生涯を捧げ尽くされたお方であり、本当の学道の人であった、と、はっきり言い切らなくてははいけません、私たち自身が、そのようにはっきりと切り切れる真宗学徒にならなくてははいけないのか、と、そんな気持ちが強く動くのであります。

そんな気持ちのなかで、感情も少々高ぶっておりますので、どんなお話ができるか、自分でもまったくわかりま

せんが、できるだけ具体的に、先生からお聞きしたお言葉とか、あるいは、先生が身をもって教えてくださったお姿などを念頭に浮かべながら、それを手掛りとしてお話をさせていたかどうかと思っております。

いま、私は、先生のことを、新しい真宗学を身をもって切り開いてくださった開拓者であり、そういう具体性を内実とする学道の人であった、と、こう申しましたが、いつでありましたか、もう時も忘れてしまいました。NHKのラジオ放送、たしか「朝の訪問」という番組だったと思いますが、先生が放送記者のインタビュに答えるかたちでお話しをなさったことがありました。先生はいつものように……、いつものようにと申しましたが、生前のご様子をご存知ない方が沢山おられるので、少々お話しがしくいんですが……、とにかく、決して話題を沢山持っておられる方ではありませんでした。その点では曾我量深先生とはずいぶん違うタイプの先生でした。曾我先生はなかなかご趣味もおありでして、ことに相撲はお好きでした。その点、金子先生は無趣味なお方で、ただお聖教を学ぶということ以外にはなかった。それはほんとに素気ないほどでした。そんな先生がインタビュにに応じてお話しをなさったのです。まあ、本論といいますが、中心的なお話しは充分になさったのですが、最後に放送記者が、「先生、いろいろとお話しいただいて有難うございました。ところで、先生は何かご趣味をお持ちですか」と尋ねた。それに対して先生は「趣味はお聖教を拝読することです」と答えられた。で、記者はまた「ご長寿の秘訣のような健康法をやっておられますか」とお尋ねしたら、先生は即座に、「健康法はお聖教を拝読することです」とお答えになった。そこで、記者はまた「何かお好きなものはありますか」と尋ねたら、先生は「好きなものはお聖教を拝読することです」と返事をしたので、放送記者ももう二の句が継げなくなって、インタビュを終ることにしてしまったそうです。その後で放送記者が、金子先生の印象を他の人に「金子大榮という先生は、真宗教学の第一等の学者であると聞いていたので、恐る恐るインタビュをしたのだが、まるで赤ちゃんみたいな人だった」と話したということです。この話を先生は時折笑いながら話してくださいましたが、それは、私にとりまして、決して冗談でもなければ、軽い印象

といったようなこととして、笑って聞いているわけにもいかない、という気がするのであります。つまり、金子先生の全生涯は、お聖教を拝読するということに尽し切られているということです。そのことを逆に申しますならば、先生の生涯から、このお聖教を拝読するということを抜いてしまうと、その生涯はゼロになるということです。私は、そういうところに、真宗学の根本性格が表現されている、と思うのです。つまり、真宗学とは何かということを、一言で言うとするならば、それは、生活と一枚の仏教学である。いや、そういう言葉さえも不必要になるほど、生活態のただ中から語られ、そして、生活の意味を具体的に明らかにしていく仏教学、それが、真宗学という仏教の学びなのでしょう。それは、いろんな学者にインタビュをしたことのある放送記者にとっては、まったく想像を超えた人として、こうした印象になったのだらうと思います。つまり、生活プラス真宗学ということはない。あるいは、生活の中に真宗学があるのでない。具体的な人間の生活の全てが真宗を学ぶ唯一絶対の場所である。お聖教を拝読することの他には生活と呼ばれるものはない。だから、御飯を食べることも、話しをすることも、笑うことも、泣くことも、寝ることも、病むことも、その全てがお聖教を拝読するということの中にある。それは、朝から晩まで机にこじりついてお聖教を読んでいるという、そういう姿のことをいうのではないのでしょうか。むしろ、そういう生活様式ならば、逆に、実生活から離れてしまうのでしょうか。書物を横に置いて食事をするという熱心な学者がいる、ということを知ったことがあります。そういう熱心さということとは質が違うのです。非常に極端な言い方をすれば、たとえ一日に一頁もお聖教をひらかないことがあったとしても、お聖教を拝読することの内容として生活の全てがある、というようなものでありましょう。それが、真宗学である。そういう真宗学の本質を、先生は身をもって教えてくださったのであります。こんなことを思い出そうとしますと、いくらでも心に浮んできますから、きりが無いのですが、いつでありましたか、あれは、たしか朝日新聞から、親鸞聖人生誕八〇〇年の記念にということ、真宗教団連合として『歎異抄』が出版された時のことだったと思います。『現代を生きるころ——歎異抄——』と

いう総題のもとに、真宗十派の先生方が、それぞれに担当をきめて執筆されました。その書物の総説を金子先生がお書きになられたのですが、ちょうどその頃、先生はお体をこわしておいでだったのです。私が心配してもどうにもならないことなのですが、企画が企画だけに心配になりましたね、先生、大丈夫だろうか、という気もありまして、先生のお宅をお訪ねしたことがあります。先生はお床に就いておられました。私の顔を見て即座に、「原稿はできてるよ」とおっしゃいました。その一言をお聞きして、私は勝手にほっと安心したのですが、しばらくお話しをしていくうちに、先生が、こんなことをおっしゃいました。「廣瀬君、有難いものだねえ。寝ているときには、ちゃんと机がこっちへ来てくれるよ」とね。しかし、机が勝手に歩いて来るはずはないのであって、机はいつもあるべき処にあり、先生は机から離れて床に就いておられるわけです。ところが、先生は、「有難いもんだねえ。原稿を書こうと思おうと、机の方がちゃんとこっちへ来てくれる。こういうことをご廻向というんだねえ」と、こう言われました。

その一言をお聞きしたとき、私は、ハッと思いました。少くとも真宗学徒であるならば、廻向ということを正しく語るというためには、ずいぶんと苦勞をするものであります。それを、事もなげにと申していいほど、あっさりとして、日常の言葉のなかで言い切ってしまうたのですからねえ。もちろん、机が来るといったって、ただ来るわけではありません。それは、奥さまや、お傍についておられるお家の方たちが、机を運んでおられたに違いないんです。ところが、先生は、そういう皆さんのご苦勞をも全部包んで、「机が来てくれる」とおっしゃるのです。机が来て、自分に原稿を書かせてくれる。そして、その原稿が一冊の大切な書物の中で役割を果してくれる。そういう全体を、たまたわった事実、ご廻向の事実としておいておいてになるのです。「この人を見よ！」という言葉がありますが、こんなことを次々と思いつけても、金子先生が一生涯かかって真宗学を学ばれたというよりも、先生のご一生こそが真宗学である。もしそうした先生のご一生のなかに真宗学そのものを読み取ることができないならば、私たち自身、真宗学徒であるということは、決してできないことであり、また許されないことである、と、このように思わず

にはおれないものがあります。

こうした思いがしきりと去来するなかで、「真宗学とは何か」という、とてつもなく大きく、また大胆不敵な講題を掲げさせていただいたのであります。しかし、このとてつもなく大きな題の方は、私の気持としては、表の題ではなくて、あのサブタイトルのように示されている「金子大榮先生の学恩を謝す」という方が、本題なのであります。正直に申せば、深く金子大榮先生の学恩を謝す、ということしかないのであります。では、何故に「真宗学とは何か」というような題を出したのかということですが、真宗学とは何か、真宗学とはこれだ、と、そんな具合に何かを主張しようという気持はさらさらありません。そうではなくて、「真宗学とは何か」ということこそが、金子大榮先生の遺言である、と、私には聞きとれるということです。新しい真宗学の開拓者として、その九十六年の生涯を捧げ尽された金子先生が、さらに、御自身の死という事実をもって問い掛けている遺言、それが、「真宗学とは何か」ということであると、聞えてくるのです。「廣瀬、お前にとって真宗学とは何か」と、厳しく問い掛けられているという気がするのであります。もう少し普遍的なもの言い方をお許しただけならば、人間にとって真宗学とは何か、という問い掛けが、先生の命終、死という事実であると思うのであります。たしかに、命終という事実は、絶対の沈黙であります。絶対の沈黙であるからこそ、どのような言いわけも許さない、絶対の教言なのであります。真宗学を生きた先生の死が、遺教として、後学の者に「真宗学とは何か」と問わないはずはない。ですから、「真宗学とは何か」という題は、私の講題であるというよりも、先生が、その一命を捨ててまでして、私たち全員に問いかけている遺教であり、したがって、残された私たち一人々々の課題なのであります。ですから、もし私たちが、この問いに応答することができないならば、私たちは金子先生を師と仰ぐ資格はないし、したがって、このような集会をもつ資格もないことになる。もしもったとしても、それは、きわめて世俗的なことであって、決して法会ではない。こういう集会をもったものとして、私たちは、このことをはっきり決着つけておかなくてはいけないと思うのです。

そうでないと、先生の恩徳を謝し、先生のお徳を讃仰すると言いながら、身勝手に先生を利用して、自らの怠惰を誤魔化していくという、本質的に悪質なことになるのではないか、という気がしてならないのであります。そして、そうした甘えと利用とを決して許されなかったのが、あの先生のご一生であったのだと思います。

九十六歳まで生きられたと申しますが、先生は決して健康なお体ではありませんでした。とにかく、三十歳まではとても生きられない、と言われていたということですが、人間の体の五臓六腑が、もともとあるべきところに正常に位置していなかったのが、先生のお体の状態だったと聞いております。ところが、そんな病弱なお体で九十六歳まで生きられたのです。それは、精神力によるものだというような、そんなことではないと思います。そうではなく、自己の生活という具体的事実、真宗を学ぶということを賭け尽して、それで何の後悔もないといういのちを生きられた、そのことが、一日々々を充足させることになったからこそ、寿命をまっとうされたのであると思います。その結果、と申しましたが、これはあくまでもご縁のもよおしに他ならないことではあります。九十六歳でお亡くなりになる時には、お医者さんが驚くほどにどこも悪くないという状態になって、その一生を完了なさることとなったわけです。まあ、これ以上申しますと、何か奇跡信仰のような話になりそうですので、この辺で打ち止めにおきますけれども、「往生は、その日その日の涅槃である」とか、「大涅槃とは完全燃焼である」と頷かれた先生のご一生を改めて思いますとき、実感としてそういうことを感ずるわけでありませう。そして、このような金子先生のご生涯が、他の諸々の学問研究と異なる真宗学の本質を、はっきりと証明していると思えますし、同時に、そうした異質性をきっぱりと言い切れるような真宗学徒に、私たち一人々々が成らなくてはいけないのではないかと、そういうことを痛感するのであります。それは、決して、奇を衒うということでもなければ、妙に頑なになるということでもない。まして、菩提心に立つ学問だというふうな鼻を高くして他を蔑むことでもない。そういうこととは全く逆であり、そういう意識との関りを本質的に断つものでしょう。生活のなかに真宗学があるのではなく、真宗学が生活にある

のである。ですから、真宗学から生活を抜いたら真宗学ほど空疎な学問はなくなりすし、逆にまた、生活から真宗学を抜いたら、生活も本質的に空しく消極的になる、と、そこまで具体化していなければ、親鸞聖人が「大乘のなかの至極」という言葉を以て明確にした浄土真宗を明らかにする学問は成立しない。そのような質、あくまでも質の問題ですが、そういう質においてのみ真宗学は成り立つのであると思います。それ以外のことは、別に真宗学でなくとも充分やれる、いや、充分以上に成果を挙げることができなのでしょう。思い出しましたが、金子先生が面白いことを言うておられます。学問には、どうしてもやらなくてはならない学問、やったほうが良い学問、やってもやらなくともいい学問、やらないほうがいい学問、と、大体、四通りあるものだ、という意味のことを、よく言われました。それからまた、学問と調査とは違う、しかし、その峻別ができないから、学問の性格が不明瞭になるのではないか、学問の性格が不明瞭になるから、調査の役割も曖昧になる、ということも言われました。そして時には、かなり厳しい口調で、今日は研究発表が盛んだといわれるが、あれは、学問研究の発表なのか、それとも、調査結果の報告なのか、その辺りがはっきりしない、ともおっしゃいました。こうした先生のご発言は、決して独善的な立場に立って、いろいろな調査研究の営みを蔑んでいるのではなく、むしろ、尊重をなさり、敬意を表しているのでしょう。ただそういう調査研究が尊敬し尊重するに足るものとして位置づけられる基盤の不明確さを指摘なさっておいでになるのでありましょう。

こうしたことを思いいますなかで、ことにごく最近、新しい真宗学の開拓者といった実感を、きわめて具体的に知らせていただいたという経験がございます。それは、数人の若い人たちの協力を得まして、つい先月、春秋社から『肉眼』という題のもとに、「曾我量深・金子大榮書簡」というものを出版致しました。その内容は、明治四十二年一月四日から昭和十八年五月一日までの三十五年間のお手紙であり、実に二一八通という数に及ぶものであります。しかも、一通だけを除きますと、それは全部、曾我先生から金子先生に宛てて出されたお便りです。どうして、こんな

に沢山のお手紙があるのかといえば、それは、金子先生が曾我先生からのお便りを、三十五年間にわたって、大切に保存しておられたからであります。それを拝見させていただいたとき、私は、その書簡の内容もさることながら、この事実のうえに、すでにして真宗学の基本性格が明らかにされていることを知りました。特に、その二一八通のお便りのなかに、ただ一通だけ、お二人の先生の往復の書簡があります。それは、明治四十四年一月のものであります。しかし、確かに往復という具体的な形をとったものはこの一通だけですが、他の二一七通も全部が往復の書簡であったに違いないという内容は、あの書物をご覧願えばおわかりいただけるでしょう。ところが、現実的には曾我先生のお便りしか残っていないのです。実は、そのことについても、直接、曾我先生にお尋ねした記憶があります。お二人の先生がまだお元気だった頃ですが、金子先生から昔の柳行李一杯のお便りをお預りして、私の岐阜の自坊で一夏かかって、伊東慧明氏と二人で整理を致しました。その時に、曾我先生のお宅に、全部ではないにしても、金子先生からのお便りが残されているのではないかと思ひまして、曾我先生のお宅をお訪ねして、そのことをお聞きしたら、曾我先生は言下に、「私は、手紙というようなものとはとっておきません」と、こう言い切られました。失ってしまったとか、探せばあるかもしれないというようなことではなく、「とっておきません」と言い切られました。このことも、ただ曾我先生らしいといって、すませてしまうことはできないことではないでしょうか。一方は大切に保存され、一方は決して保存なさらない。保存されないということは、決して無用になったから捨てたということとは違う。むしろ、その時のことは、その時で完結する、と、そういうことの証しなのでしょう。また、その折々に送られたお便りを保存なさるということも、ただ惜しいから取っておくということではない。もしそういうことなら九十六年も生きられた先生のお宅は書簡保存の倉庫をいくつ建てても足りないということになるのでしょうか。そうではなく、金子先生は、曾我先生のお言葉にいつも耳を傾けて生きていこうとされた、ということだと思います。取っておくから物持ちがいいとか、失ってしまったからルーズだとかいう、そんなこととは質が違うことなのでしょう。ちよつと面倒

な言い方をするならば、完結と完結の持続の具象化、そこに、思想における往復の感性というものがあり、また往復の思索、共同の思索というものがある、ということだと思えます。そして、こういうことも、真宗学成立の重要な要素である、と考えるべきでありましょう。ともかく、そうした二一八通の書簡のなかに、はっきり往復のかたちをとった書簡が一通だけありまして、その両方の書簡に「両眼人」というお言葉が、大切なお言葉として用いられておりますので、それをもって、書物の題名としたわけです。

実は私には久しく心に一つのこだわりがありました。それは、徳川時代の古い伝統の宗学に対し、それと選ぶようにして、清沢満之先生に源流を見出す教学が、近代真宗教学というような表現で語られておりまして、このことは、もはやどのような疑義をもさしはさむ余地のないこととなっているようです。もちろん、そのことについて私もとかくの疑惑をもっているわけではありません。ただ私の気持のなかに、もう一つはっきりとさせることのできない感情のようなものが、ずっと流れておりました。それは、生前、曾我量深先生がときどきおっしゃったことですが、「清沢満之先生は、有限とか無限とかいう、哲学の言葉を使って、ものを書いたり話をなさったりした。だけれども、もっと長生きをなさったならば、仏教の言葉で真宗を語ることをなさったでしょうね。もっと長生きをなさったならば、そのお考えもお言葉も、もっともっとはっきりしたでしょうね」という意味のことを、時折お話しになった。そのことが、私の耳の底の方にひっかかっておりまして、曾我先生は、こういう言葉で何をおっしゃろうとしたのだらうか、と、考えつづけていたのであります。もう少し言葉をつめて申しますと、近代真宗学における必然の因を清沢満之先生のように証しするという、そういう明確な位置はどこにあるのだらうか、といった問いを持っておりまして。確かに、清沢先生によって新しい真宗教学は開かれることとなった。そういう意味では、清沢満之先生を待たずしては、新しい真宗教学は生れて来なかったに違いない。しかし、それは強力な縁であったのではなからうか。近代真宗教学誕生の因といい切れる証しがあるものであらうか。こんな疑念が、私の心の奥に払拭し切れないままにあった

のであります。と同時に、近代真宗教学の生因としての清沢満之先生を、はっきりと証しされることを待望しつつづけていたわけです。こうした私の思いは、また、時折、金子大榮先生が、「清沢先生の、ああいう表現は、親鸞聖人の教えを現代に表現し切っているのだろうか」と、問い掛けるようにおっしゃっては、「そうだろう、そうなんだけれどもねえ」と、自問自答されていたご様子も、思い合されて参りまして、何か、もうひとつ確かめなくてはならないことがある、という気がしてなりませんでしたし、そういう部分を不問に付しておいていいのだろうか、と、私なりにずいぶん考えさせられました。しかし、表立って表現のできるようなことでもありませんので、困惑していたのであります。そういう私の困惑に対して、はっきりと、そうではないのだ、という証拠をつきつけるようにして示してくださいだったので、「両眼人」という言葉を中心とする、お二人の先生の往復書簡なのであります。それによって、私は、お二人の先生が確かめようとしておられたことと、私の抱いていた疑問とは、質が違うのだということ、まず第一に教えられました。お前の抱いている危惧のような感情は私的なものだ、と、はっきり証拠物件を示して、質してくださいのであります。それが、両先生の唯一の往復書簡でありました。書簡は、曾我先生から金子先生へ宛て送られた方が先でありまして、明治四十四年一月四日という日付けになっております。明治四十四年という年は、ご承知のように、清沢満之先生によって東京巢鴨の地に真宗大学と命名されて開校された新しい大学が、いろいろな問題の渦中で閉鎖され、京都の地へ帰ることとなった年であります。そして、曾我先生が真宗大学の教授の職を辞することとなったのも、この年でありました。そういう状況下で書かれた手紙であります。前後を省略して少し拝読してみますと、

今の思想界には無眼人（第一の信眼なき懷疑的現実主義の人）あり、一眼人（唯第一の信眼ありて第二の信眼なき人）ありて、両々真面目不真面目を諍ふ。誠に二者共に真面目也、而も又不真面目也。

今代にあるべくしてなきものは両眼人に候。如来を信ずる信眼あると共に自己の現実を照知する智眼ある人に

候。此信眼と智眼とを具したるは、唯、清沢先生であった。

と、こういうお手紙が、曾我先生から金子先生のところへ届けられているのです。「今の思想界には」というんですから、東京によって代表される日本の思想界全体を見つめながら、そして、仏教が近代的に表現化されていく現状を見つめながら、曾我先生は、それを、「無眼人」と「一眼人」はいるけれども、「両眼人」がいらない。如来を信ずる信眼と自己を照知する智眼とを具備した人こそ、今の世が求めている人であり、今の世に存在しなくてはならない人である。しかし、そういう人がいない。こうしたこと、果して真宗の教えが「大乘のなかの至極」として、具体的に明らかにされるであろうか。おそらくそういうことを憶念しながら、今こそ必要な人、真宗を今日の開顕する人物は「両眼人」である、と、こう確かめて振り返ってみたところに、如来を信ずる信眼と自己を照知する智眼とを具足している「両眼人」がお一人おられた。それこそ、自らの師、清沢満之先生であった、と、はっきりと領いて、「此信眼と智眼とを具したるは、唯、清沢先生であった、」と、言い切られたのでしよう。そこには、この人ましますことにおいて、浄土真宗は興隆するのだという、深い謝念と自信とが、いきいきと伝わって来ます。そうした曾我先生からのお便りに対して、一月十一日付で金子先生が御返事を書いておられます。それは、非常に深い感情の秘められたお手紙であります、その一節を拝読してみますと、

小生は因縁薄うして清沢先生より親しく教訓に接せず候いしが、大兄の論文によりて先生の文章を味ひ、以て智恵円満に向はんと志しつゝあるものに候

と、きっぱり言い切られ、その後、越後の地において、曾我を知るものは金子、金子を知るものは曾我であるという、そういう評判がたっていることを知って、驚き、かつ感激をした。自分にはそんな力量はないけれども、そういうふうな故郷越後の人たちに言わしめているのは、曾我先生が自分のことを愛護し照覽していただくからに違いない、と、その恩徳に感謝する文章がありまして、そのことに感泣なさって、お手紙を、こう結んでおられます。

唯だ唯だ謹んで両眼人たらんことを志すの外なく候

とね。このような内容の往復書簡が、ちょうど明治四十四年という、大学の歴史から言っても、清沢先生によって「浄土真宗の学場」として設立された、近代のいのある仏教の学場、それが、崩壊せしめられるかたちで、清沢先生が自覚的に捨離されたはずの京都へ引き戻されるといふ時に、曾我量深、金子大榮のお二人が、改めて清沢先生の存在意義を、信眼と智眼とを具備した両眼人として確かめて、お互いに自分たちが、その両眼人とならなくてはならないのだということ、確認し合っておいになるのであります。その時、曾我先生は三十六歳であり、金子先生は三十歳といったお歳頃であったと思いますが、こうしたお二人の先生による清沢先生への改めての確かめと、それに応えて立ち上がろうとするお姿に對しまして、その意気たるや軒昂たるものがある、といったような世間なみの讃辞を呈することなど、とてもできないでしょう。そこに、厳しく感じられてくるものは、「両眼人」となろうとする決意、つまり、清沢先生のご意志を継いで、新しい真宗教学の開拓者たらんと誓い合う覚悟であります。この決意と覚悟が、お二人のご一生を決定したのだ、と、そのようにはっきりと見定めずにはおれないものがあります。

はつきり申し上げますと、このことが大谷大学のいのちを救ったのだと思います。更に具体的に申し上げますと、真宗学という新しい仏教の学を生んだのだと思います。そして、そのことが、清沢満之先生の歴史的意味と位置とを、改めて具体的に明らかにすることとなったのだと、そのように思うのであります。このことが、やがて大正十一年に、大学が文部省の単科大学令による大谷大学となりましたとき、真宗学という学名をもった学問を、世間に認めさすということにもなるのであります。大正十二年に金子先生は「真宗学序説」という公開講演をなさいましたが、あれが、名実共に真宗学という学名を公認させることとなったのでしよう。話が主題からはずれるようですが、本学が文部省令に基く大学として、その大学名も、ほとんど意味のない、まるで符牒のような、大谷大学という名になったということは、時代的要請があったとはいいまでも、決して清沢満之先生の願った大学の方向性からは出て来ない

のではないかと思います。つまり、「本学は他の学校と異なりまして」と語られた、清沢先生の大学の独自性は薄れて、一般大学化したのですからね。私には、この時期こそ本学における危機の時期であったのだとさえ思えるので、本学の長い歴史のなかにおいて、いままでには無かった性格の危機を、清沢満之先生の建学の精神に立ちかえって救ったお方が、三代学長佐々木月樵先生でありましょう。つまり、清沢先生によって性格づけられ方向づけられた大学が、一般大学化されようとする時に、有名な「大谷大学樹立の精神」と、はっきり言い切って、建学の精神を「大谷大学」という文部省令による大学において明確にしたということは、他の諸大学にあっては殆ど例を見ない自覚的な大学論が、具体的に語られたということであり、その内容として大谷大学における学問研究教育の性格を明確にしたのであります。その中で、真宗学という、これまでの学問領域にはまったくなかった学問と、その学の名とを、公に認めさせたということがある。新しい学問の性格を明らかにして、その学名を公の機関に承認さすということは、ちよつと想像ができない程に大変なことでありましょう。ことに真宗学なんていう名の学問を、あの時代に独立の学問として承認さすには、ずいぶんご苦労なさったのだらうと思うと同時に、その底にある自信の程がしのばれます。それを中核とするようにして、佐々木先生は、大谷大学における哲学の位置を明確にされ、その他の諸学に人文科という位置を与えたのです。他の大学にも哲学や諸学は大切な、そして、新しい学問として、それぞれ置かれたに違いありませんが、大谷大学という大学における学問研究の性格を明確にするために、それぞれの学問研究の意味の主張をしたわけですから。とくにこの「人文科」という呼称は、独自の意味と責任とを担うものでして、つまり、例えば歴史をやるとしても、それを、人間の文化の学としてやるところに、大谷大学の歴史学の意味があるということですね。それと、いま一つは、仏教学の内容の新しい性格を、「僧侶の専有物」的性格から完全に脱皮した「万人の学」として、具体的に決定されたのであります。こうして、「真宗学」「仏教学」「人文科としての諸学」という、大谷大学における独自の学科制度を、学問の性格づけを明瞭にすることにより明確にされ、それを以て、大学の性格をはっきり

りさせたのでありますから、稀有な大学論だと申すべきだと思います。そして、その全体を「大谷大学樹立の精神」の具現であると言い切られることによって、文部省令による大学となることへの決断と、そうした一般性のなかに身をおく大谷大学の方向性を明らかにされたのです。当時の社会状況や教団状況を思いましますとき、この佐々木先生の大学論の一字々に刻み込まれている願いの深さを、いまさらのように思い知らされます。この佐々木先生の大学論があるからこそ、大谷大学は自らのいのちを失わないのだ、と、思うのです。それと同時に、この佐々木先生の大学論が「大谷大学樹立の精神」と名づけられているところには、清沢先生の「真宗大学」開学の志願を具現するのであるといった、深い自負が知られることであります。

そういう状況のなかで、「真宗学」の性格を決定するということがどれ程大変なことであるかということは、もう十分におわかりいただけていることだろうとは思いますが、その性格づけを「真宗学序説」という講題のもとに明確になされたのが金子大榮先生ですね。その講演が書物となって出版されたのは大正十二年でありまして、いま、ここに持って来ましたが、その大正十二年版の『真宗学序説』ですが、この序文を拝見しますと、

この書は、十一年十月中旬、わが大谷大学が単科大学となれる記念として、公開講座を京都山口会館に開けると
き講述せるものである。

と、はっきり述べておられます。「わが大谷大学」が文部省令による大学となったことを記念するための講述の筆録である、と言い切っておられるわけです。そして、この『真宗学序説』において、その「序説」ということのもっている意味というか、そこに托したお気持ちについても、金子先生は

序説というとカントの (Prolegomena) を思い浮べられるのであるが、自分にはあれほどまで、考えが纏まっては
いないのであるが、しかし、あのような精神で、自分の見当づけを語ろうと思うのである。

と、こう述べておられます。実に堂々たる「序説」ですね。カントの思想のなかで果している Prolegomena の意

味と位置を憶念しながら、「真宗学序説」を語るのですからねえ。そこで明らかにされようとしていることは、真宗学の公開性ということでしょう。その公開性を明らかにするために、カントが *Prolegomena* を書いた精神と意味とを憶念して語るのだ、と、こう言い切られるのです。私は、ここに、すでにして真宗学の性格は決定したのだということ強く思わずにはられません。カントの *Prolegomena* が、カント哲学において、さらにはすべての西洋哲学において、どのような位置をもっているのか、それについては、私のような門外漢の知るところではありませんが、大方の見当はつきます。ともかくも、それ程の意味を『真宗学序説』にもたせているのだという自信と、識見というものををもって、真宗学の出発をはっきりとさせたということのもつ意味は、非常に大切なことであると思います。

その大切ということの意味は、先程お話ししました「両眼人」という言葉のもとでの、曾我・金子両先生の頷き合の深さと、その頷きを基点として、お二人の一生涯を尽して確認をし、樹立していくこととなりました新しい仏教の学である真宗学の根本性格が、すでに明らかにされている、ということでもあります。その根本性格とは、文字通り信眼と智眼とを具足する人を生産する学問、それが、真宗学である、ということでもあります。ですから、真宗学という学問は、決して諸思想の動きのなかで右往左往しながら、他の諸思想の顔色を窺いながら格好をつけていくような、そんな卑屈な学問ではない。だからといって、やたらと頑固に自己を守ろうとするような学問でもない。つまり、学問のためにやるような学問ではなく、人間を生産する学問である。真の人間を生産するという具体性を以て、自らの思想の内実とするという、そういう性格の学問である、と、申してよいのでありましょう。両眼人と成ろうとするところに成り立つ学問であり、両眼人を生産することを自らの使命とする研究でありましょう。

そういうことを思うにつけても、金子先生が最後に、われわれの『親鸞教学』のために、病床でペンを執ってください「光輪鈔」というご文章は、その中のどの一章、どの一句をとり上げてみましても、真宗学のいのちを表現し切っている。極めて短い文章ですが、あそこに金子先生のご生涯を掛けて明らかにし続けられた真宗学が凝集さ

れています。しかし、凝集されていると申しましても、いわゆる答えが出切って終ってしまったということでは
ありません。確かに金子先生における思想ということで申せば完結していると申していいものを感じますが、それと
同時に、その完結こそが、さらに新たな真宗学の出発点への、厳しい問い掛けであり、警告であるということを思い
ます。このことも「光輪鈔」の中で教えていただくことの一つではありますが、真宗学とは、人間の今日性と共に在る
無窮の学問であります。人間を生産する学問は、人間と共に現存しつつ、人間の終りを以て学の終りとすると
ような、そういう、完結の連続無窮性をいものちとしているものでなくてはならない。真宗学は、そのような学問であ
りますし、そういうことを具体的にご教示くださったのが「光輪鈔」である、と、このように思います。こうしたこ
とを私が痛感致しましたのは、この「光輪鈔」の原稿を書いておられる頃に、先生ご自身のメモとして書かれたもの
を見せていただいた時からのことでもあります。それは、後に『くずかご』という題で、先生の遺稿集を出版させてい
ただきましたが、その中に入っております。『くずかご』という題は、先生ご自身のお言葉を頂戴してつけたので
すが、その中に「光輪鈔」のためのメモというか、ノートが収まっております。これは、印刷してしまいますと、大
きなことが消えてしまうような性格のノートでありまして、ほんとうに、何と申したらいいいのでしょうか、お床のなか
で筆を執ることがご無理なのに、どうしても書かずにはおれないということ、筆を執っておいでになる先生のお姿
が、はっきり伺えるものなのです。ですから、文字の形をとっていなくて判読しなくてはならないというようなこ
ろさもあります。しかし、書こうとなさっておられることは、透明過ぎるといってもいい程に明確なんです。その中
の一部分を拝読してみますと、

「汝」ということ

○量深

自身を信ず

信に死して願に生きよ

と、こんなふうな書き方がされているところがあります。「汝」ということ ○量深 自身を信ず 信に死して願に生きよ」、これが、「光輪鈔」の原稿をお書きになって時のノートの一部分ですが、苦勞をして、言葉を選んで書かれた文字だということが、非常によくわかる気が致します。ところで、この短い文章、文章というよりメモですが、それから私たちは何を感じ取るべきなのでしょう。私は、このように感じましたね。「汝」という一字が、真宗学の眼目である、ということでもあります。つまり、真宗という事柄として親鸞聖人が確かめて下さった仏教のちなのでしょう。と同時に、人間の思想的な営みということでも申しますならば、特に近代という時代は「我の自覚」という言葉で押えられておりますし、その「我」ということが、どのように作用しているのかということについても、常に論じられてきているのでありますが、そういう、近代・現代のなかで、親鸞聖人の教えは、何を、どのように明らかにし、語り掛けていくのかという、大きな今日的課題に対して、はっきりと、この「汝」という一語で、それへの応答の決定点を表現している、と申してもいいのであります。確か西洋の思想のなかにおいても、「汝」という一字で表わされるような大きな課題があり、ご承知のようにマルティン・ブーバーに『我と汝』という題名の書物もありますが、そういう西洋における「汝」の思想と会通する必要はないと思います。「汝」という言葉は仏教の根本性格を表わす言葉として、古くからあるわけです。そして、この「汝」という言葉を以て表わされる教えが、どのように聞きとられるかによって、仏教の死活も決まると言うても過言ではないわけです。その「汝」という一字をわざわざカッコで括って、それを、「ということ」と書かれた時、金子先生は、その「汝」という教言を全身を以て聞きとらうとされたのだと思います。そうすることによって、その「汝」ということを本当に明らかになさったお方が、曾我量深その人であるということ、量深の上にマルをつけて、「○量深」とお書きになったのでしょうか。では曾我量深先生は、それをどのように明らかにされたのか、とさらに尋ねられて、「自身を信ず」と頷かれた。ご承

知のように「自身を信ず」という言葉は、善導大師の、いわゆる機の深信と呼ばれているお言葉を、親鸞聖人が『愚禿鈔』のなかで「決定して自身を深信する」と言い切られたものであります。機の深信ということ、徒らに人間の感情をゆさぶる悲観的な人間了解としてではなく、正しく信ずるに足る自己自身に出遇うた自信の表白であると頷かれた。このような機の深信についての親鸞聖人による領解を、一点の曖昧さも残すことなく明らかになされたのが、曾我量深先生である、というわけでしょう。それでは、そのように「深信」される「自身」とは、いったい、どのような自分自身なのかというと、それこそが、「信に死して願に生きよ」と呼びかけられた自身であり、したがって、「信に死して願に生きん」と決定した存在であるというのが、曾我量深先生の徹底されたことである、と、このように金子先生は頷いて記されたのだと思います。「信に死して願に生きよ」というお言葉は、親鸞聖人七五〇回御遠忌を記念して曾我先生がお話しになった時の講題であります。私自身、このお言葉に深い感動をおぼえまして、まことに厚かましい話ですが、曾我先生にこれをご揮毫いただくようお願いに参上しましたら、曾我先生は即座に「信に死して願に生きん」と書いてくださいました。つまり、「信に死して願に生きよ」という呼び掛けのお言葉は、そのまま、「信に死して願に生きん」という領きのお言葉と呼応しているのであります。しかし、曾我先生のこのお言葉について金子先生は、「この言葉は、自分が一生をかけても本当に答えを出せるかどうかかわからない」ということを、くり返しおっしゃっておられました。そんなこともあって、私自身、「信に死して願に生きよ」というお言葉をやたらに使われますと、腹立たしいというか、そう簡単にわかる言葉でしょうかね、と言いたくなるのです。それを金子先生は最晩年のノートに

「汝」ということ

○量深

自身を信ず

信に死して願に生きよ

と書いておられるのです。これだけの文字を生命をけずるようにして記しながら、その頷きを「光輪鈔」という文章として表現なさっているのですね。個人的なことを申して恐縮ですが、金子先生がお亡くなりになる二日前に、先生のお宅からわざわざお電話をいただきまして、早速にお訪ねしたことがあります。実は、その数日前にもお目に掛りまして先生からお話を承りましたが、その時にはたまたまテープを持参しておりましたので、お話をテープに納めさせていただきました。その時も決してお言葉がはっきりしていたとは申せませんが、何回か聞き直しますとわかって参りますが、いちばん最後にお目に掛りました時には、ほとんど聞きとることができませんでした。しかし、そんな状態のなかで一言だけわかりましたのは、「光輪鈔、よく読んでくださいよ」というお言葉でありました。これは、お言葉としてわかりましたが、本当に私の心が粗末だったものですから、先生の「光輪鈔」をよく読めとおっしゃったお意を領解することができませんでした。そのご本意に気づかせていただいたのは、先程来お話しをしている『くずかご』に収められている最後のノートを拝見した時です。ずいぶん大きなことを言うようですが、そこに真宗学の未来が托されている、と、思い知らせていただきました。先生が一生を尽して開拓してくださった真宗学の未来が、さらに深い課題として提起されている、と、まことにお粗末なことですが、ようやくにして知らせていただきました。こうしたことを思うにつけても、真宗学という学問は、清沢満之先生により視座が定められ、曾我・金子両先生が一生涯を捧げ尽して構築してくださった新しい仏教の学問であるということ、はっきりと知らされるわけであります。その新しさは、単に近代的というような現象的事柄として言われる質のものではなく、言わば人間のいのちにおける新しさでも申したいものです。そういう意味で真宗学とは、いつでも新しくあること、現在のであることを運命づけられている仏教の学問である、と、言い切れるものがなくてはならないと思います。いつでも新しくあることを運命づけられている、ということは、常に新しい課題を表現しつづける現実態、つまり、現実の社会、現実の歴

史状況、現実の人間状況、そういう事柄が、全体的に問い掛けてくる問いに対して、徒らに引きまわされて右往左往することなく、ただ仏教として答え切る道を明らかにしつつける、ということではないでしょうか、これが、文字通り、仏教を現人的人間の真宗として明らかにする真宗学の根本性格である。ですから、本質において、そういう根本性格が曖昧になるとき、真宗学は活力を失うか、異質のものに変る。何か、こうした覚悟のようなものを、いつでも自己の内において確かめつつけていなくてはならない。そういう厳しさにおいて、真宗学は現在の学であるといえる。単に近代的とか現代的といったことではなく、内に常に現在性を確保しつつける、という意味で現在の学であるといえる。というよりも、言い切らなくてはならないということを痛感するのであります。少々言葉がきついかもわかりませんが、私は、そう思うのです。

もうひとつ思い出しましたが、これも、もう二十五年以上も前のことでありますが、金子先生が、大谷大学の大学院で集中講義をなさっておられた時のことです。先生が一週間の講義を終えられてご自宅へ帰られた時、私は、お礼を申したいと思ひまして、先生をお訪ね致しました。その時には、先生がずいぶん興奮なさっておいでになりましたね、お部屋へお邪魔しましたら、私の顔を見るなり「今度の講義では大発見をした」とおっしゃるのです。どんな大発見をされたのかと思っておりましたら、「真宗学をやる人間は、少なくとも親鸞聖人のお言葉に素直でなくてはいけないということがわかった」と言われました。興奮して、そういうことをおっしゃる先生のお心持がわからず、度胆を抜かれたという感じで、ポカンとしておりましたら、「廣瀬君、浄土真宗を開いたのは法然上人だね」と、念を押すように言われたんです。これもまたびびりましたね。しかし、先生から、そうおっしゃられてみますと、私自身の意識の底には、浄土真宗を開いたのは親鸞聖人だという思いが、根深く居坐っていることに気づかされました。お話をしたり、ものを書いたりするときには、浄土真宗を開いたのは親鸞聖人だとは言わないようにしています。が、その言わないようにしている意識の底には、浄土真宗を開いたのは親鸞聖人だという根深い思いが居坐っている。

ところが、親鸞聖人のお言葉に素直になってみると、決してそうではないのだ、とおっしゃるのです。先生のお言葉をお聞きしていて、そういうことに気づいて興奮しておいになる先生と、そういうことにも気づけず、お聞きしても、さして興奮しない私自身との違いというか、そんなものも感じまして、ずいぶん自分がお粗末だなあと、改めて知りました。

智慧光のちからより

本師源空あらわれて

浄土真宗ひらきつつ

選択本願のべたもう

というご和讃ひとつを思い起してみましても、この親鸞聖人のお言葉に素直になれば、弁解無用、説明無用のこととして、浄土真宗を開いたのは法然上人だ、とわかります。そんなことで、ああそうだったんだなあ、と、改めて考え直しておりましたら、先生は、そんな私に追い打ちを掛けるようにして、「でもね、真宗学を開いたのは親鸞聖人だね」と言われました。この先生のお言葉をお聞きしたとき、まるで鉄鎚で頭をなぐられたような気がしました。それ程はつきり意識していたわけではありませんが、やはり意識の底には、真宗という宗派ができてから真宗学もできたのだ、と、そんな思いがありました。ところが、先生の大発見のお言葉は、そういう漠然とした思いを切って落したのです。そして、そういう漠然とした思いの上でやっているお粗末な私の真宗学を、木端微塵に打ち砕いてしまわれたのです。浄土真宗の開祖は法然上人だ、しかし、真宗学の学祖は親鸞聖人である、と、こう言い切られたのです。私は、そのお言葉を聞いたときの驚きを、今でも忘れることができませぬ。そして、このことは、「新しい真宗学」と申しますときに、徹底してはつきりさせておかなくてはいけないことだと考えます。「学」、浄土真宗を学ぶ、学問するということの根本を貫通するものは何か。それは、法然上人により「浄土宗」として開顕された仏道を「真宗」

として領いていくということの外にはないのでしょ。それ以外のことをやる限り、真宗学ではなく、あえて言わせていただくならば真宗の諸学である。私は決して、そういう諸学がつまるところのつまらないのとお話しようとしているわけではありません。ただ、真宗学とは何かをはっきりさせたいと思っただけのことです。そういうこととのなかで、法然上人によって「浄土宗」の名のもとに開顯された仏教を、限りなく「真宗」として領いていくところに真宗学があり、その真宗学によって浄土真宗の開祖が明らかになる。開祖が明らかになるということは、単に人物が判明するというだけの意味ではなく、浄土真宗という仏事の意義が現代的に明らかになるということでしょう。そういう意味では、人物を明らかにするのは真宗学ではなく、仏事を明らかにするのが真宗学である、と、言うべきでありましょう。そういう学仏道の門を開いたのは、これは、親鸞聖人以外にはいません。こうした金子先生の確かめのお言葉を聞かせていただいたうえで、改めて『真宗学序説』を読み返してみますと、そういう事柄については、すでに示されていることに気づかされますねえ。それを一言で申しますと、真宗学とは、悪しき意味での護教主義的な宗派学とえらび、同時にまた、単なる知的関心を満足させたための、悪しき意味での文化主義的な教理学ともえらんで、人間の真宗を明らかにする仏教の学問である、と言うことでありましょう。このことは、真宗学の本質に関しての事柄ですから、自他共に非妥協的に厳しく確かめつづけていなければならないと思います。と同時に、そういう真宗学は、曾我量深先生が、金子大榮先生が、そして、それに先立って、若くして亡くなられた清沢満之先生が、それぞれにご一生を尽されたように、まさに人間が一生を尽すべき学問である、と思います。それは何故かといえ、真宗を学ぶということは、一人の人間の一生を尽すべき具体的事柄であると同時に、人間という存在における根本的事柄に根ざしているからであります。つまり、人間は真宗を明らかにすべく生きていくという、そういう人間存在における根本課題を基底として成り立っている学問なのです。私は、改めて、このことを見究め見定めておかなくてはならない、と考えます。しかしまあ、そんなことは、仏教であるならばみな述べていることであり、したがって、自明

のことであります。しかし、自明ということは、いったい、どういふことなんでしょうか。自明であるということは、いつでも現在の的でなくてはならないということでしょう。ですから、それは自明のことだといって、問うことを止めてしまふならば、すでに自明でなくなるのです。本当に自明なることは、いま、自己の、そして、人間のただ中で明らかであるという、そういう証しがなくてはならない。したがって、自明ということは、単なる「理」ではなく、「事」として証しされてあるということでありませう。そういう現在性をいつでも維持していなくてはならないことであるかぎり、一刻の油断も許されないものです。この油断を許さないということが、真宗学のいのもちでありましょう。

ところが、自明ということとして、つまり、すでにわかったこととして研究をつづけてきたところに、仏教の学問研究が精緻を極めましたも、現在する人間のただ中において、大乘として働かなくなってしまうたのでしょうか。浄土教は万人救済の教えであるという。しかし、果して今日、人間の救済を成り立たしめているかというところ、決してそうはなっていないでしょう。人間から問い掛ける問題は、どんどんと新しくなっていくにもかかわらず、仏教のほうは、救いを自明の理としていて、そういう問いのただ中で改めて問うということが、余りにも稀薄であったために、そういう人間の痛切な問いを無視してしまったということはないでしょうか。そうであるとすれば、私は、それは、大きな犯罪であるとするら言いたいのです。何故かといえば、仏教は大乘を名告り、また浄土真宗は「大乘のなかの至極」であると標榜しているからです。大乘と名告り、「大乘のなかの至極」を標榜しながら、人間を自覚的に救済する道を、現在の事として示さないということは、やはり、犯罪と言わざるを得ないでしょう。そういうことと合せて、私は、親鸞聖人の使われた「浄土真宗」というお言葉は、法然上人によって浄土宗として開示された仏教を「大乘のなかの至極」として確かめたお言葉である、宗派の名ではなく、仏教の現在性を具体的に確める、仏道の確認語である、と、こんなふうと考えております。ですから真宗学も、このことを基底に見据えていなくては活力を失ってしまうと思います。そういう意味においても、こうした確かめをしつづけていくということ、一人の人間の生涯を尽す学問

であり、そのことの中において、人間の課題を問いつづけていく学問である、と、どこかではっきり頷いておかななくてはならない、ということをおもうのであります。

大分と時間をとりましたが、では、そういう真宗学とは、具体的には、どのような学問なのかということ、最後に申しておきたいと思います。このことも、金子先生からお示しをいただいたことでありますが、改めて自らに確かめておくべきことである、と思います。親鸞聖人をもって真宗学の学祖である、と、はっきり認識するならば、聖人の主著である『顕浄土真実教行証文類』こそが、真宗学の具体的内容である、ということをお領くべきでありましょう。ということは、『顕浄土真実教行証文類』、つまり『教行信証』が、何を明らかにしようとしているのか、いかに明らかにしようとしているのか、そして、何故に明らかにしなくてはならなかったのかという、そういうことを私たち一人々がお領くということでしょう。『教行信証』六巻をひもといてみますと、「浄土真実」を明らかにすると同時に、「方便化身土文類」においては、人間の現実を仏道という一点から徹底して明らかにしておられます。それは、内についても外についても、徹底した批判であります。ただの批判ではない。深い傷みをもった批判であります。あのような批判は、単なる現象についての皮相的な批判ではなく、そうした現実を生きる人間そのものへの傷みであり、まさに「歎異」であります。歎異という批判は、どれほど人間が努力しても、人間的立場においては成立しないものです。したがって、歎異の主体は如来です。如来によって人間が歎異の客体とされる。人間の一点一画も曖昧にすることを許さない、そういう如来の歎異の客体とされる。だからこそ「方便化身土」というのでしょう。そのような如来の歎異は、限りなく人間を傷みつつ、人間の成就を悲願したもうものであります。それゆえに「方便化身土文類」は

人いづくんぞ能く鬼神に事えんや。

という一句で結ばれるわけでしょう。一言でいえば、人間の自立と尊厳ということ、人間の自立とか尊厳

とかいうことは、つねに論じられながら、それを明らかにする方法がはっきりとしないのは、それが人間に立場を置く思想だからでしょう。親鸞聖人は、そのことを「顕浄土真実教行証」という仏道の事として明らかにするわけです。この「浄土真実教行証」ということは、押えて申せば「浄土真宗」ということでしょう。「教行証」という言葉は、仏教が仏道として現在しているという事実を表わしているのです。仏道として現在しているということは、今を生きる人間の宗として働いているということの外にはありませんから、そういう意味において、「浄土真実教行証」を押えて言えば「浄土真宗」となる、と、私は考えております。したがって、「顕浄土真実教行証」とは「顕浄土真宗」である。ですから真宗学とは「顕浄土真宗」ということを具体的内容としている学問である、と言うてよいのでしよう。こうしたことを考えて参りますと、現代的な真宗学とか新しい真宗学とかと改めて言わなくても、真宗学という学問それ自体が、限りなく現在性を要求してくる質の仏教学である。われわれが取って付けたようなこととして、現代的視点から真宗学を見直すなどと考えますと、そういう考えそのもののなかに隠されている人間内の関心の虚偽性を見破ってしまうような仏教の学、それが真宗学なのでしょう。そういう仏教の学を「顕浄土真実教行証」と表現されたのでありましょう。しかも、そうしたことを「文類」という方法を以て明らかにする。その明らかにする立場は「愚禿釈」と名告るような立場である。つまり、「愚禿釈」と名告るような存在の地平に自己を見出した人によってのみ明らかにし得る仏教の学、それが、「顕浄土真実教行証」であり、「顕浄土真宗」であり、真宗学である、と、このように私は思っております。真宗学とはこのような仏教の学である、と、金子先生は教えてくださったのだと思っております。このようなことを金子先生は「聞思」という一言の中に見開かれたのであります。金子先生のお言葉として「聞思の教学」というお言葉もありますし、先生ご自身のご住居を「聞思室」と呼んでおいででしたし、先生の院号も「聞思院」ですね。これは、決して先生の思いつきといったようなことではなく、「聞思」という一言に真宗学の基本的性格を見究められたのであります。この「聞思」という言葉は、『教行信証』そのものが明らか

かにしている言葉であります。つまり、信の具足、不具足ということを明らかにする内容です。

信にまた二種あり。一には聞より生ず、二には思より生ず。この人の信心は聞より生じて思より生ぜず、この故に名けて信不具足となす。

と、親鸞聖人は『涅槃経』の文によって述べておられますが、信具足、具備満足した信の内実が「聞思」ということだとおっしゃるのでしょう。ですから、不具足の信とは、この「聞思」を内実としない信ということである。信という名の空虚性を意味しているわけです。しかも、その「聞」については、やはり『涅槃経』によって

読誦にあたわずして他のために解説するは、利益するところなけん。この故に名づけて聞不具足とす。といひ、また

論議のための故に、勝他のための故に、利養のための故に、諸有のための故に、持読誦説せん。この故に聞不具足とす。

とも言うておられますね。いまはそうした事柄に立ち入ってお話しをすることはできませんが、こうした仏説を現代を生きる人間として聞きとり、そして、諸々の学問と照し合せてみますと、われわれが真宗学という学問が、はたして真宗学と呼び得るようなものかどうかが、きわめて明瞭になってくるのではないのでしょうか。極端な言い方をすれば、利益するところのない仏教の学問が、はたして仏教を明らかにできるか、ということでしょう。もしそういう学問であるならば、それは聞不具足であり、その研究がどれほどすぐれたすがたをとっていても、「論議のため」とか、「勝他のため」とか、「利養のため」「諸有のため」といった、いわゆる世俗的関心によるものであって、決して仏教の学ではないと言わざるを得ません。こうした聞不具足、信不具足という二つの仏説によって、真の仏教の学を明らかにするということを、押えて申せば、仏教が明らかになるといふことは、そのまま、信心の行人となることであり、そのような仏教の学を真宗学と呼ぶのである、と、はっきり言い切るべきではないかと思えます。

つまり、

深く信不具足の金言を了知し、永く聞不具足の邪心を離るべきなり

ということこそ、真宗学のいのものであると言うべきでありますよ。

金子大栄先生の学恩を拝謝するという思いひとつをもって、改めて、清沢・曾我・金子という三人の先生によって代表される真宗学の本質を尋ねてまいりますとき、つねに「真宗学とは何か」という問い掛けが、私自身の学びの根本姿勢を厳しく叱正してくださっているということを、痛感させられるのであります。そして、その厳しい問い掛けに対して襟を正して答えようと思わないならば、そういう先生方のお言葉を口にすることは許されず、口にすることがない、と、思い知らされるのであります。ずいぶんと興奮して話しましたので、失礼なことや乱暴なことを申したのではないかと思いますが、この頃しきりと私自身の心中を去来していることを、お話しさせていただいたということ、大変有難く思う次第であります。

（本稿は、昭和五十七年十二月十六日に行われた金子大栄先生七回忌法要における記念講演をもとに執筆していただいたものである。）